

科学研究費成果報告書「近現代日本の政策史料収集と情報公開調査を踏まえた政策史研究の再構築」(基盤研究(B)(1)、代表者伊藤隆平成15・16年度、代表者伊藤隆、課題番号:15330024)より

7. 松崎 昭一氏

まつざき・しょういち 元読売新聞社記者

日時: 2004年9月24日

出席者: 伊藤隆 東健太郎 武田知己 高橋初恵 服部龍二 梶田明宏 今井貞夫
藤代義之 鹿島晶子 置塩文 小宮京 浅羽みちえ 大久保文彦 藤井優子
茶園義男 藤枝賢治 駄場裕司 西川誠 佐藤純子 丹羽清隆 岡久仁子
萩谷茂行 黒澤良 桑野真暉子 岩壁義光 矢野信幸 濱田英毅 瀬畑源

伊藤 前回の続き、第二回目ということでお話をいただきたいと思いますが、またきょう終わらなければ、次回ということでお願いいたします。

松崎 きょう初めてお出でになった方もいらっしゃると思いますが、私、松崎でございます。よろしくお願ひいたします。前回は、クリントン流に言えば『マイライフ』の話を中心に進めさせていただきましたが、きょうはもう少し、いわゆるオーラルヒストリーなるものと『昭和史の天皇』との関係について、話を進めさせていただきたいと思います。

前回、オーラルヒストリーとは直接関係のない、私の新聞記者経験というような話をさせていただきましたが、それと関連してフツと思いついたことがございます。それは、読売新聞から昭和62年11月2日に『読売新聞発達史』という本が一冊出ているわけです。それからもうひとつは、平成6年11月2日に『読売新聞百二十年史』という本が出ております。まず、『読売新聞発達史』を見ますと、「第4章 全国紙への展望」「第5節 高級紙と大衆紙の融合」という見出しが出てきますが、この「高級紙と大衆紙の融合」というところが味噌だと思うんですよ。ということは、やっぱり読売新聞の中には、どこかで大衆紙だという気分があって、そうではなくて俺たちは高級紙になっているんだぞという、そういうような気持ちが込められていたのだらうと、この見出しからそういうニュアンスが汲み取れます。

また、ここで『昭和史の天皇』をわざわざひとつピックアップして第11項に掲げてあるのですが、『昭和史の天皇』の特徴は、日本におけるオーラルヒストリー——聞き書きを修正した決定版ということである。歴史の中心点にいた関係者に直接インタビューすることで、埋もれた真実を発掘して生の声をテープに収めた。」という記述があるわけです。

それから、その後の『読売新聞百二十年史』は、有名な渡邊オーナーが社長になった頃に作った社史で、ここでもちゃんと、「第3章 昭和戦後」「第10節 高級紙への思考」と、その第3項に『昭和史の天皇』で新手法」というサブタイトルを付けて出しているわけです。そこには「特色は、関係者・当事者・目撃者たちの記憶に基づいて、埋もれた真実を掘り起こし叙述する、

いわゆるオーラルヒストリーに徹したことであった。いわば、同時代の肉声を響かせたのである。」というような、たいへん立派な言葉で書いてあります。これは読売新聞のオフィシャルな出版物でありますので、永遠にこれは残っていくという意味で、オーラルヒストリーをここで読売新聞社自体がオーソライズしていると言えると思うんです。

しかし、その後で考えてみると、私たちがやったことが、はたしてオーラルヒストリーと言われるような仕事ができているのか、読売新聞を離れて読売新聞というものを客観的に見ていくと、はたしてどうかなという疑問が、無きにしも非ずということです。

それから、もうひとつ面白かったのは、『昭和史の天皇』はひとつの別の囲み記事になってずっと連載していたわけですが、『読売新聞百二十年史』によりますと、「この囲み欄は、読売新聞社にコンピュータ処理が導入された最初の欄という意味で特記に値する」ということです。あの読売でも、印刷をするのに職工さんが活字を取ってやっていたわけですが、それが、初めてコンピュータライズされた第一号であるという意味で、たいへん面白いと思うんです。

まあ、そういうことをひとつ頭に置いていただきたいと思いますが、『昭和史の天皇』のそもそもの立ち上げのくだりは前回、お話をさせていただいたわけですが、いま読みました二つの読売新聞社史を見ますと、あたかも『昭和史の天皇』はオーラルヒストリーというものを意識してずっと書いたようなニュアンスに受け取れるわけです。しかし、あの記事そのものをスタートした時点では全く、オーラルヒストリーという概念というか、言葉自体すら何もなかったわけです。

ちょっと話が横にずれて申し訳ありませんが、『昭和史の天皇』は出版されてからもう 30 年経っておりますが、実は今月のはじめ、私のところにいきなり社から電話があって、「松崎さんの電話番号と住所を中央公論が聞きたいと言ってきていますが、教えてもよろしいですか？」と。ご存じのように、中央公論はいま読売新聞傘下にあるわけですが、「結構ですよ」と言ったら、折り返し中央公論から電話がありました。それはどういうことかという、『昭和史の天皇』全 30 巻はとても腹にこたえてたいへんだけれども、その中で 8 巻本にしたゴールド版を、オンデマンドで出版したいという話だったんです。これは私が編集したわけですが、昭和 20 年 1 月に行われた天皇の四方拝の儀から始まりまして、8 月 9 日までの重要な出来事をピックアップして 8 巻本に収めた、B 6 版よりもちょっとサイズの小さい版のものです。そこで、「それは一体誰が発案をして、どういう経過で出版にこぎつけるのか、それは中央公論の独自の判断ですか？」と聞いたら、「全く中央公論独自の判断で、これについては、失礼だけれども、伊藤先生にはご相談申し上げてはおりません」という話でした。それで、とにかくそれについては、オンデマンドで出版する意味合いを前書き的に書かなければいけないから、それを書いていただきたいということなんです。

これはたいへん嬉しいことでもありますし、とにかく前書きを作って、それを叩き台にして中央公論と話したところが、中央公論としては、終戦ということを知っている世代というのは、早く言えば七十歳世代になってきていると。したがって、若い世代の方たちは、終戦のときに一体何があったのか、どうやって終戦にもっていったのか、このようなことについては知識がなくな

っているから、こういう時代だからこそ、改めて終戦というものをもう一度考え直してみる、そういういい機会だと思って考えたのだそうです。

よく考えてみますと、来年が終戦から六十年という、ひとつの節目の年になるわけです。それを念頭において最近、半藤一利氏の本をはじめとして昭和史関係の本がいくつか出ているのも、そういった時代の節目というか、流れというか、そういうものを踏まえた状況ではないか。中央公論もそれを踏まえて、オンデマンドで出版しようとしているのではないか。それでとにかく前文を作りましたが、中央公論としては、とにかく若い人に読んでもらいたい。したがって、オンデマンドにする、つまり、図書館を中心に買ってもらう意味もそこにあるということで、できるだけ分かりやすい若者向きの前文にしてほしいと。しかし、こっちはちょっと書けないから、それは上手く手直ししてくださいということで、それはなかなかよくできた前文になったと思います。

それで、10月の末に宣伝をして全国の図書館に注文を求めまして、早ければ今年中、来年早々にかけてオンデマンド版で8冊。したがって、これはちょっと値段が高くなるわけです。写真をたくさん付け、サイズを大きくする——つまり、活字を大きくするそうです。というようなことで、もうすでに遠い彼方に薄れかけていた『昭和史の天皇』がまた復活するということは、たいへん私自身としても意味のあることだと思うわけです。そのことだけちょっとご報告させていただきたいと思いました。

もとへ戻りまして、オーラルヒストリーという言葉は、『昭和史の天皇』が始まった当時は、この言葉自体が少なくとも日本の学会にはなかったということ。したがって、我々もそんなものがあるなんてことは知りもしないし、俗に言う新聞記事というのは、その事について知っている人、その事に関係のある人の話をもとにして記事を作るというのが建前ですから、そういう証言をとにかく綴っていこうというのが最初だったわけです。しかも、『昭和史の天皇』をご覧になった方には分かると思いますが、前書きのところで言っているように、要するに、いい悪いはともかくとして、日本という国柄から言って、天皇という存在は忘れてはならない存在だし、その天皇という存在を中心にした我々の時代、あの苦しかった時代を考えてみようということで始まったわけです。したがって開巻第一号は、天皇の“天心の笑い”から始まりまして、昭和20年1月1日に宮中で行われた四方拝の儀式で空襲のサイレンが鳴るという、そのような状況から始まるわけです。

それから、新聞のああいふ特殊な読み物的な記事というのは、その当時いくつかあったんですね。皆さんご存じかな、「交通戦争」という言葉は、読売が作った言葉です。これは当時、やっと庶民の懐もよくなってきて、マイカー時代に入ってきた。そうすると、一年で交通事故死する人数が、日清戦争のときの戦死者よりも多くなった。ここに目を付けて「交通戦争」という言葉ができたわけです。これはなかなかたいへんいい言葉だと思うんですが、いくつかそういうような特別の連載記事というのを、いくつかやっているし、現在でも連載記事がいくつもあるわけです。しかし、長くても大体1ヵ月というのが暗黙の了解事項で、それ以上長くなるとだれてしまうという不文律的な考え方がありました。

それで、『昭和史の天皇』が始まったときにも、これは1ヵ月くらいかなと。しかし、とにかく終戦ということを見ると、終戦の8月15日だけを書くのでは、もうすでに文春から半藤一利氏が作った『日本のいちばん長い日』が出ておりましたから、そうするとあれに匹敵するようなものになっちゃうし、それがはたしていいのかどうか。それよりも、あの8月15日に到る間に起こったことをそのときに合わせて、たとえば、4月の段階では沖縄決戦をやろう、3月の段階では東京空襲をやろう、そういうような、まあ、言葉は適当ではありませんけれども、季節に合わせた、その重要なときに合わせた事項を中心にやっていこうよと。だから、沖縄戦争をやるときには、当然のことながら戦艦大和はやらなければいけないだろうとか、いくつかそういうプランニングをしまして、「8月15日まで行きゃあ、これはたいへんなことだぜ、8ヵ月だよ」「これはもう新聞の連載記事としては異例中の異例だけれども、やれるかいね」「じゃあ、とにかくやってみようよ」ということで始まったわけです。

いま考えてみますと、プロローグのところで打ち上げた“天心の笑い”というのは、これは後で伺ったことですが、木戸さんがものすごく感激してくれたんですよ。とにかくあれでもって、「お前のところの記事はいいぞ」と。僕が木戸さんに何回もお話を伺いに行ったときに、木戸さんはあのプロローグのところに非常に感心されて、ああいうドキュメント風の連載記事だと、出だしはもっと凄まじい迫力のあるところから始まるのに、いままでどなたも触れたことのない昭和20年1月1日の天皇の四方拝の儀式のところから始まった。そういうところにも木戸さんが感心というか、好意を持ってくださった原因のひとつがあると思います。まあ、それは、最初の季節に合わせてやろうよということもあったわけですが。

それから、立ち上がった当初、執筆は辻本芳雄が担当したわけですが、この辻本芳雄は現職の社会部長ですよ。現職の社会部長というのは、人事から予算から何から全部握ってやるわけですよ。これを誰に書かせるのかというときに、前回もお話したように、後のペンネームで言うと菊村到だとか何人か候補に上がりましたが、そのとき編集局長だった原四郎が簡単に、「あっ、お前書け」この一言ですよ。それで、辻本芳雄が社会部長という肩書のまま書いたわけです。

あのときの辻本芳雄の家というのは、ひっちゃかめっちゃかの状態で、奥さんが三回目の肺病の大手術の後で病院に入ったまま、子供は四人いて、一番下の子供はオムツをしているんですよ。その子供のオムツを僕も取り替えたんですから。いちばん下の子供はさっちゃんと言ったかな。その子はいま自衛隊に入っていますよ(笑)。国軍のどこか最精鋭の兵力になっているでしょう。それで、いまでもあのときのことを思い出すと分かるんですけども、辻本芳雄というのはたいへんな酒飲みで、一晩でウイスキーのボトル半分飲むんですよ。それで平気。それから、鰻は二人前、靴は28cm、タバコはハイライト3箱という、とにかく桁外れな人でした。

最初の頃『昭和史の天皇』を担当したのは、辻本芳雄社会部長と宮内庁詰めだった星野甲子久、それと社会部の遊軍記者だった松崎昭一、この三人です。この三人で知恵をしぼって、とにかく季節に合わせてやろうよというようなことで始まって、じゃあ、どういうところから始まるのか。これは、私みたいな遊軍の、早くいえばアナザ・ワンの兵隊なんかには思いもよらなかったときに、あの辻本芳雄が“天心の笑い”というプロローグを作ったわけです。

僕はあの頃、毎日のように、いまの江古田かな、東京都が造った都営住宅というのか公団というのか、鉄筋のビルでなかなか立派なところでしたが、辻本芳雄の自宅へ仕事の関係でよく行っていました。辻本芳雄は茶色の革ジャンパーを着て、丸い卓袱台を出して、その横には赤ん坊が寝ているわけですよ。それで、掲げて見ると向こうが見えないような汚いコップにウイスキーをガバガバッと注いで、おかずは冷や奴ですよ。それを飲みながら、書いては破り、書いては破りしている。決してサササッと書いたものではありませんよ。本当にいま考えてみても、あれは鬼気迫るような状況だった印象が、僕にはありありとこびりついています。

そしたら、あれは12月28日だったかな、夜の8時頃だったと思いますけれども、「できた、できた！」辻本芳雄は関西出身ですから、「できた、できた！」じゃないんですよ。「できた、できた！ 松っちゃん！」ポンと僕のところへ投げ出してきたんです。それを読んでみて、まあ、頭を張り倒されたような気分になりましたね。ハァーッ！文章というものはこういうふうにするものかと。そういう状況の中で社会部きっての名作家という人が、書いては消して、書いては消して、最初書いたものにビューッと棒を引っ張って欄外に書いて、その欄外に書いたものをまた横っちょにビューッと引っ張って書き足して、それでまたビリッとやって、俗に言う紙屑の山のようにして彼は書いていたんです。“天心の笑い”を読んでいただくと分かると思いますが、実にほがらかな文章ですよ。それがそういう状況で出来上がったんです。文章というのはそういうものだなということを、改めて思い知らされましたね。とにかく最初は、昭和天皇と言っても人間だと。人間には、笑いもあり、泣きもあり、それこそお手洗いにも行くんだよと。その人間がいちばん人間らしい姿をとったときは何か。笑うときと泣くときだよ。辻本芳雄は、そのエッセンスのところをスパッと切り込んでくる名人だったんです。それで“天心の笑い”という、あれは全く辻本芳雄の造語ですよ。字引を引いてもそんな言葉は出てきません。あの力量というのか、これはとてもじゃないけれども、やっぱり天性のものでしょうか。

その書き出しができて、天皇なんだから、天皇が天皇らしいときは、1月1日に何があったんだろう。我々は1月1日から紙面をスタートさせるわけだから、1月1日にまず天皇は何をやったのか。そこで、宮内庁のベテラン記者だった星野に、「星やんよ、そこんどこ聞いてくれよ」ということで、星野はそれをやる。

その一方で、陛下が笑う反面の泣いたときは、あの御前会議であろうと。御前会議については迫水のところに行って聞いてこようということで、迫水さんのところに行って聞いたのは、忘れもしない12月24日の夜10時だったかな、8時だったかな。それで行ったら、迫水さんは当時の郵政大臣で、酒を飲んでいい気分で帰ってきて、それで話を聞いていたら、「そこでな、責任内閣というのはな……」「先生、先生、責任内閣って何ですか？」「何だ、お前たちそんなことも知らないでよく話を聞きに来たな」なんて言われて、こっちは「申し訳ありません」と謝りながら話を聞くという、我々の『昭和史の天皇』の立ち上げというのは、そんなところですよ。

僕自身だって、学校で歴史なんて勉強したことは全くないんですよ。それから、星野はもともとオペレーター上がりですからね。辻本芳雄も学歴は非常にプア。いまここにいらっしゃる皆さんの学歴を辻本芳雄が聞いたなら卒倒するようなものですよ。そういう訳の分からないのが3人

集まったことが、逆に「それなあーに？」と聞いたひとつの大きなポイントだったと思うし、新聞記者というのは、何でも知っているわけではありません。逆に言うと、何も知らない。だから、「どうなの？」と聞いていくわけですよ。殺人事件があったとすると、その原因は何なの、どうやって殺されたの。

最近、九州で女が四人殺したというのがありましたが、新聞記事を読んでも何が何だか分からない。僕に言わせると、あれは記者が警察の発表記事をそのまま写しているだけです。独自に取材をして、どうして、どうなって、どういう因果関係が後ろにあるのかを書くのが新聞だろうと僕は思うんですが、いかがでしょうかね。

伊藤 いやいや（笑）、本当に分かりませんね。

松崎 そういうことで、「責任内閣ってなあーに？」と聞いて、そのときに迫水さんから言われたのは、あのとき陛下が涙をぬぐわれたというのは文章に書いてありますが、「陛下が歔歔された」と言うんですね。“泣いた”とは言わないんです。“歔歔”（キョキ）という難しい漢語を言うんです。「先生、歔歔って何ですか？」「歔歔というのはな、苦しみに耐えながら涙が出てくることで、陛下はその涙をぬぐわれたんだよ」と酔っぱらいながら言うことを、こっちは「へーっ」とメモを取っていましたが、そのときの“歔歔”という言葉はいまでもありありと覚えています。一度くらい僕も誰か歔歔してくれないかと思うんだけど、それは無理だと思いますがね（笑）。

まあ、そんなことで、四方拝の儀から始まって流れていくわけですが、その当時、読売は銀座にあって、プランタンが読売の本社でしたが、あれは7階まででしたから、その上に部屋を造って、その中に一つ天皇部屋というのをもらってやっておりました。そこに星野が宮内庁から帰ってきて「辻さん、辻さん、陛下がごつつんこしたんだよ、そういう話があるんだよ」「えっ、なに、陛下がごつつんこした！ そりゃあーおもしろいな」とこう来るわけです。辻本さんというのは、「おもしろいな」と言うのと、「そんなんあほらしい」と言うので、漫才みたいな話ですけど、彼のあだ名は“あほらしさん”と言われていました。それで、陛下がごつつんこという話を聞いて、「これはおもしろいな、なんじゃ、そりゃあ？」と。

それは要するに、特攻隊が初めて出たときに当然、陸軍の侍従武官が陛下と机を挟んで戦況を説明されるわけです。それで、「特攻隊が出撃しました」と言ったときに、陛下はスッと立ち上がって頭を下げたと言うんですよ。そしたら、侍従武官もお辞儀まではいかないけれども頭を伏せたような形なっていましたから、陛下の髪の毛が侍従武官の額に触ったそうです。それをごつつんこしたと言うのもオーバーですが、そういう話だったんですね。ただ、陛下が特攻隊の出撃についてそれほどお心を悩ませたというのか、お心を打たれたということは、それまでの我々が知っている限りのいわゆる戦記物には何も出てこないわけですよ。また、これがいちばん人間臭い、昭和天皇らしい一面であると。これはいけるというので、辻本芳雄がそれを書いたのが、「陛下と特攻隊（神風特攻隊と陛下のお心）」になったわけです。

前にもお話ししましたように、辻本芳雄は戦争末期にフィリピンの特派員として行っておりまして、敗残兵になってひどい目に遇って帰ってくるんですが、例の高千穂空挺隊が出撃するときの

現場に彼は立ち会っているわけです。だから、フィリピンのクラークフィールドなんかの状況も全部知っているんですよ。彼が特派員だったのは二十三歳くらいじゃないかな。それで、特攻隊が出撃するときの状況を書いて、「マバラカットにススキの穂が揺れていた」なんて書いてあるので、「辻さん、あんな暑いところでススキの穂がなびくわけないだろう」と言ったら、「バカもの！俺はな、このときこの目で高千穂空挺隊を見送っているんだぞ！」と言われて、もうこっちは何も言えないですよ。まさに秋のフィリピンにはススキの穂は揺らいているんですよ。これは普通に読むと嘘のように聞こえますよ。あのときは本当に怒鳴りつけられて、こっちも身の竦むような思いでしたが、辻本芳雄にしてみれば、ススキの穂ということは、ある意味では彼の青春符であるし、彼があんな惨烈なフィリピンの終末期に従軍記者として立ち会ったという、その生々しい記憶が複雑に絡み合っているススキの穂だと私は思うんです。しかし、これは怒られましたよ、本当に飛び上がるくらいに怒られた。

まあ、それで特攻隊があって、この間も戦艦大和のことはちょっとお話しましたが、副長の能村次郎という人がどこにいるか分からないというので、電話帳を調べて伊東にいることを割り出したわけです。その戦艦大和の副長だった能村次郎は生きて帰っているんですからね。それで話と手記を取ることに成功して、それも後で『慟哭の海』という本になっているんですが、これは読売から出版されているのでご存じかも知りません。

それと同時に、「4月、エープリルフールするときといえば文句なしに沖縄だよ、沖縄やろうよ」というので、沖縄をどういうふうな角度でやるかというところは、言葉は悪いけど、ひとつの作戦ですよ。これを考えているときに、「そのときの第三十二軍高級参謀の八原博通がどこかに生きていたのを読んだことがあるから、ちょっと俺、調べてみるから」と八原博通の居場所を調べてみたら、皆生温泉のそばに逼塞していることが分かりましてね。それで、電話を調べて「会っていただけますか？」と言ったら、秦郁彦さんの『日本陸海軍の制度・組織・人事』というのが東大出版から出ていますが、あれで八原博通のところをご覧になると分かるように、武士の情けであそこに書かなくてもいいのに、「捕虜」と出てくるんです。これは八原博通にとっては最大の恥辱なんですよ。

というのは、八原博通は、最後に牛島軍司令官が割腹をして、それから長参謀長も自決をしたのを見届けたときに、八原博通は長参謀長から「軍司令官の命令だぞ」と言われていたことがあるんです。いかにしてもこの沖縄戦の戦訓を持って沖縄を脱出し、本土に帰って大本営に報告してくれという命令を彼はもらって、沖縄の土地の人のボロボロの衣服に着替えて知念半島のほうに脱出して行くと、土地の難民がたくさんいるわけです。その中に紛れこんでいたのが、さされて米軍に捕まってしまう。それが捕虜だと出ているわけですが、じゃあ、牛島軍司令官の大本営の戦訓を持って帰れというのが文章になっていたかという、あのときにはなっていないわけです。口頭でそういう命令を受けた。八原大佐としては、その命令を受けたのだから、俺はなんとしても帰りたいと。

その前に、沖縄戦をどこかでお読みになった方がいらっしゃると思いますが、同じ陸軍の航空参謀で神という参謀は、刳船に乗って一人で沖縄を脱出するのに成功しているんですね。そうい

うこともあって、八原大佐としては一応そういう立場なんだから、一般市民に紛れ込んで、なんとかして沖縄を脱出したいと思っていたのでしょう。まあ、そういう思いがあったところへ、私から「お目にかかりたいのですが」ということで、「いいですよ」という割合簡単な話でしたね。

話はちょっと飛びますが、八原大佐の奥さんはまさ子さんといいまして、いま九十四かな、五かな。一昨年まではちゃんと筆で年賀状をくださいました。「もう年ですから年賀状はこれで失礼させていただきます」という但し書があって、この八原まさ子さんというのは、昭和天皇が皇太子のときの侍従武官長の娘さんですよ。それで、八原大佐は陸士のトップだったかな、三席だったかな、そんな優秀な人でしたが、僕の話はすぐ脱線して申し訳ないけれども、鳥取県の出身なんですよ。二・二六事件のときの西田税も鳥取出身で、やっぱり県民性で……あつ、ここに鳥取の人はいないでしょうね（笑）。ちょっとね、非常に思い込みの強い方がいらっしゃるんじゃないかなろうかと、僕は付度するんですけどね。それはともかく、八原さんは、陸士、陸大と優秀な成績で出た方で、アメリカ駐在員で行っているわけです。だから、知米派でちょっと珍しいんですよ。そのためもあって疎外されたのと、何かもうひとつあるのだらうと思うんですが、いわゆる軍人さんのおおらかさというのは、ちょっとないですね。

それで、「会いますよ」ということでしたから、僕は、京都から山陰線に乗って、そのとき余部の鉄橋を越えて、「ああ、いいところだな」と思って眺めたのをよく覚えていますよ（笑）。そして、皆生温泉に部屋を取って、そこへ八原さんが来て沖縄戦を初めて語ってくださったんです。そしたら、「ちょっと待てよ、俺が通常的に知っている沖縄作戦と大分違うぜ」と。沖縄作戦そのものは、嘉手納湾には三個師団を張りつけて、満州から持ってきた精強な砲兵隊を嘉手納湾に向けておいて、これも第二十四師団という満州から連れてきた最精強の部隊を置いて、「さあ、来い！」と待ち構えていたわけです。これはやれるぞ、絶対に水際で追い落としてみせる、どんなに強力な米軍が来ても大丈夫だと。そのために、沖縄ではいまでも壕がたくさん掘ってありますが、どうせ艦砲射撃がくるのは間違いないのだから、その艦砲射撃を避けるために壕にとにかく入る。そういうことで壕をたくさん掘らせているんですね。

それから、これは後でもっていろいろ言われますけれども、那覇周辺、南部周辺の市民は北に逃げてくれということを経軍命令で言っているんですが、確かに軍命令ではそうだけれども、営々と築きあげた家庭を捨てて、北へ予め脱出するなんていうことはできないわけですよ。それから、子供たちは船で本土へ持っていく途中で一隻沈められています。当時としては、軍は一応、横暴、無謀はあったらうけれども、軍なりの方針は立てていたらうと思うんです。

ところが、ご存じのようにあそこでは、大本營の命令によって第九師団は抜かれるわけです。そのために嘉手納湾での水際作戦は根底から崩れてしまって、しょうがない、一個師団強を置いて、第二線にまた精強な二十四師団を置くという、変形な陣形にせざるを得なくなったわけです。だから、あの沖縄作戦の責任は、大本營、ことに作戦課長の服部卓四郎が負わなければならないわけなんです。それをいまでも沖縄軍が悪かったようなことを言っているんですから。大本營の判断では、沖縄ではなくて台湾へ米軍は上がってくるとして、台湾の防衛を厚くすること

で第九師団抜いてしまうわけです。そこで沖縄戦の第三十二軍の作戦計画は根底から崩れる。だから、昭和20年4月1日に米軍が上がってきたときに、日本軍はいないわけです。反撃もひとつもしない。「これはエプリルフールだ」とアーニー・パイルが言っているわけです。そのとき第三十二軍としては、どうぞ上がってください、我々は第二線でがっちり戦うぞと。

それで、いま普天間飛行場が非常に問題になっているでしょう。この間、あそこから上がったヘリコプターが大学に落ちましたが、あの普天間飛行場というのは、北飛行場がいまの嘉手納飛行場で、中飛行場という軍が造った飛行場が、いまの普天間飛行場ですよ。それをバツとアメリカが取ったわけです。だって、もうそのときには沖縄軍に飛行機はないんですから。それは、知覧と鹿屋から行く特攻隊が米軍を撃滅するというので、第三十二軍は、じゃあ、空のほうは全部そっちに任せるよと言って、飛行場は空っぽになっていて、嘉手納飛行場、普天間飛行場はバツと取られてしまったわけです。そういうことがだんだん分かってきて、「あれ、俺がいままで読んでいた沖縄作戦と大分違うよ」ということになったわけです。

八原博通というのは、かなり癖のある人でしたが、この前も申し上げたように、人間というのは面白いもので、話していて上手く波長が合うことがあるんですね。それで、八原博通とは、晩飯を食って随分と夜遅くまで話しましたが、話していると、ときどきちょっと書いたものを見るんですよ。それで、頭がいいのは分かるけれども、実に記憶が鮮明なんです。何月何日第二十四師団をこっちに回して、第六十二師団はこっちへ回して、それから北・中飛行場に対してはバツとこう出てくると。それを聞いてこっちは「はあーっ……」てなもんですよ。

そうやって八原博通から話を聞いたわけですが、オーラルヒストリーのいちばん決め手になるのは何かというと、テープレコーダーというやつです。ちょっと話は戻りますけれども、スタートしたときは辻本芳雄と星野甲子久と松崎昭一の三人でしたが、三人では事務的なことが動かないんですね。そこで、鈴木梅五郎と谷崎竜平をとにかく引っ張ってきてつけたわけです。そして、谷崎というのはクラシック好きで、僕が「お前、インスタントコーヒーを飲んで、この頃流行のテープレコーダーでクラシック聞いてんだろ？」なんて言ったら、谷崎はニヤニヤ笑っていましたが、谷崎は自分のお金で買った、ソニーから発売になったこの位（A4版くらい？）の大きさですかね、いちばん最初のリール式のものを持っていたわけです。それで、戦艦大和の取材は谷崎にやらせたわけですが、そのときに谷崎は、「メモを取るのはいへんよ、俺はこれを持って行って聞くんだ」と言って、そこでやったわけです。そして、能村次郎から戦艦大和の最期を聞いたときに、それを我々の天皇部屋で聞かせてくれて、「えーッ！　こんなすごい機械があるの、へえーっ！」ってなことで、じゃあ、我々もとにかく買おうかと。それで、伝票を誤魔化して買ったわけですよ（笑）。いまならたいへんですよ。それで、それを持って僕は八原博通に会いに行っていますから、先生のところに寄贈をいたしました中に八原博通の分はリールになっているはずですよ。

それで、八原博通の話を聞いて帰ってきて、「辻さんね、俺の勘だけど、八原があんなに記憶がいいのはちょっとおかしいよ。あれ書いたものを持っているはずだよ。俺をもう一回、皆生まで行かせてくれよ。俺、必ず書いたもの取ってくるから」と。当時ですから飛行機ではないです

よ、汽車で行くわけですから、あれは3日置いたくらいでしたが、八原さんは今度は自宅へ招待してくださって、「こういうものがあります」と自分が書いたものを出してきたんです。これが、右肩下がりのものすごい癖のある字ですよ、いまでも手紙は随分持っていますけれども。それで、その書いたものには、八原博通は高級参謀であり、かつ作戦主任参謀ですから、沖縄作戦で陸軍がどういうふうなことをやったのかが実に克明に出てくるんです。その中には、八原博通が首里を捨てて最後の摩文仁まで落ち延びるくだりもあるんですが、これはもう悲惨ですよ。キャタピラーでもって轢き殺された兵隊、手足が砲弾で吹っ飛んでイモムシになったような兵隊がゴロゴロして、「助けて、助けて」と言っている。その一方では、例の鉄血勤皇隊だとか、ひめゆり部隊だとか、そういう話が全部、実に克明に出てくるんですよ。

そこで、「八原さん、それ貸してよ。俺、何とかこれが日の目を見るようにするから」と言って、とにかくその八原博通の手記を新聞に載せるわけですが、全部はとても載せられないので、出版局に掛け合って「これを絶対に本にしてよ」と。それが、『沖縄決戦』という題で出版されているわけです。したがって、いまでも沖縄作戦についていろいろな人が書かれておりますし、八原作戦についての批判ももちろんあります。それから、彼の人柄等についてもいろいろ書いてありますが、少なくとも第三十二軍高級参謀が書いた手記ということで、これはやっぱり動かしがたい位置があると思います。だから、八原博通は僕に対してはもう絶大な信頼があった。

それからしばらくしてから、やっぱり頭のいい家系というのは、ああいうものでしょうね。息子さんが一橋を出て三菱商事かどこかに入られて、鎌倉の梶原かな、あそこに立派な家を建てておりましたけれども、もう大分前に八原さんは亡くなられました。だけど、奥さんはまだ亡くなったという通知はいただいていませんから、お元気でいらっしゃるのだと思います。筆でターツと書いてあって、葉書ひとつでも人柄が分かるんですね。

そういうことで沖縄作戦をやって、その頃からテープレコーダーというものの存在は動かしがたいということで、これをフルに使い始めたわけですが、ほぼその頃、木戸さんとお目にかかるアポイントを強引に取った。しかし、最初にいきなり木戸さんのところにテープを持って行って、「はい」なんてマイクを突きつけるわけにはいかないもので、そのときはテープは持って行きませんでした。木戸さんからお話を伺って、それをバーツと書いて辻本芳雄に出しましたら、その辻本芳雄の文章の最後には「この話を木戸孝允が聞いていた」と書いたもので、また上手いなあと思って感心したものです。

それからおそらく10日くらいしか経っていない頃に、木戸さんに第二回目のアポイントを取ったら、奥さんの千鶴子さんが電話に出られて言うことには、「この間の記事はたいへん主人が喜んでおりました、主人はまたすぐお目にかかると言っております」というので、二回目はスパンでした。

それで、あのとき僕は「大臣」と言っていたかな。恐れ多いので「木戸さん」とは言っていないよ。「大臣」と言ったのか、「侯爵」と言ったのか……。

桑野 「大臣」ですね。

松崎 「木戸さん」なんて言えませんから、「大臣、大臣」と言っていたような気がするんです

よ。それで、きょうはちょっと重いから持ってこられなかったけれども、前に申しあげましたが、僕が『木戸日記』を2週間かけて読んで克明にノートを取ったものが、僕のところにいまでも残っていたんですよ。「あっ、これ俺、ラーメン食いながら書いたんだっけな……」と（笑）。

それで、「とにかく大臣の話は間違いがあってははいけませんから、テープに録らせていただきたいと思うのですが、いかがでございましょうか」と言ったら、「ああ、いいよ」と、こういう調子ですよ。それで、テープを録らせていただいたわけですよ。

これは蛇足ですが、木戸さんの奥さんは、児玉源太郎大将の娘さんですから、児玉大将が台湾総督でいらっしゃったんだから、「奥様は台湾生まれでございませうか」と聞いたら、「いや、これは面白い話があつてな、総督というのは年に二回、天皇への政情報告に台湾から上京してくるんだが、そのときに仕込んだ種だよ」と（笑）。そういうふうには、あの内大臣だって打ち解けると、そういうごく内々の話をしてくださるんですよ。

それから、『木戸日記』をご覧になると分かるように、木戸さんが外遊しているのは一回限りです。これは通産官僚のときのことで、産業合理化計画をやるために、世界の産業合理化計画の状況を視察に、木戸さんは船に乗って世界一周しているんですね。ところが、「俺、何にもあんなことやってないんだよ」と、『木戸日記』を見てお分かりのように、行く先々でやっているのはゴルフですよ。どこへ行っても、船が着いたところのいちばん名門のゴルフ場に行っていてやっています。それで、「イギリスに行ったときには、かの有名なセントアンドリュースへ俺は行きたいと思っていたんだ」と。そしたら、後に農林大臣になる井野碩哉が、これは何の資格で行っていたのか、やっぱり大使館のアタッシェか何かで行っていたのでしょうか、その井野碩哉が、「木戸君、じゃあ、一緒にセントアンドリュースへ行こう」ということで、二人でセントアンドリュースに行ったそうです。ところが、髭をはやした、ハンチングをかぶってニッカボッカをはいた受付がいて、「ここはちゃんと前もってアポイントを取っていないゲストは駄目です」と言うんです。そこで、「我々ははるばる日本から来たゲストである」と言ったところ。「ちょっと待ってください。イギリス人にはいい風習があつて、午前10時と午後の3時にはティータイムがあるので、それまでちょっとそこら辺で待っていてください」と。それで、井野君と二人で芝生の上に引っ繰り返って空を向きながらいろんなこと話していたら、「カイドー、カイドー、イーノ、イーノ」という声が聞こえる。「何だ、カイドー、カイドーとは？」と、よく考えたら、イギリス・イングリッシュでは、“Kido (キド)”が“カイドー”になる。「俺たちのことを呼んでいるんじゃないか」と行ったところ、「ティータイムで上手くお前たちの番が取れたのでやってくれ」と言われたそうです。それで「俺はな、あのヘルバンカーも上手くかわして、あのとき34で回ったんだよ」と（笑）。こんな話もしてくださるような間柄になったんですね。

ただ、そういうふうになれたのは、社告で『昭和史の天皇』をやるということを書せたときには、「またぞろ新聞が変なことを書くんだらう」と木戸さんは思っていたわけですよ。ところが、「天心の笑い」から始まって、「これはいけるじゃないか」というふうにお考えになったんだと思うんです。それで、ざっくばらんにお話くださるようになったと。だから、ある程度の事前の業績というオーバーですが、そういうものと取材者が相手に対する熱意というか、そういうも

のは何となく伝わると思うんですよ。そういうことで非常に上手くいったことと、木戸さんの場合には、テープは二回目から使い出したわけです。

それから次から次へと全部テープに録っていくわけですが、今度はそのテープを字に起こさなければならぬ。テープを聞きながら、カチャッと回してダーッ、また止めて、またカチャッと回してダーッ、これは随分やりましたね。取材はいいけれども、取材の後始末のほうが三倍くらい時間がかかります。だから、テープそのものよりも、意外とあっちのほうが涙と汗の結晶なんですよ（笑）。

話はちょっと飛びますが、『昭和史の天皇』が始まって6年ちょっと経った頃、編集局長だった鷺見重蔵の任期がそろそろ近づいたから……まあ、任期というところちょっとおかしいですが、編集局長としても交代の時期に来ているからということで、昭和46年6月に長谷川実雄が編集局長に上がるわけです。長谷川実雄は、そのずっと前には社会部長をやって、それから労務担当等のいくつかのセクションをやりながら、なるべくして編集局長になる。そのときに、やっぱり自分の片腕が欲しいわけですが、それは誰でもない辻本芳雄ですよ。辻本芳雄社会部長を、肩書は編集総務ということで、社会部長から一ランク上の編集全般を統括する総務に上げたわけです。そしたら、『昭和史の天皇』は誰がやるの？「お前やれよ」と。それで、しょうがないから僕がそれを引き受けて、本にすると第13巻までは、辻本芳雄が我々の書いた原稿をもとにしながらやったもので、第14巻以降、最終巻までは、僕が同じようなことでやったということなんです。やっぱりこの責任者が代わったということは、ひとつの折り目ではあったらと思うんです。

伊藤 最初、オーラルヒストリーという言葉は全然意識しなかったということでしたが、確か1,000回か何回目かのときに、角田順さんが「オーラルヒストリーの偉大な成果である」という記事を書いて、あれで初めてオーラルヒストリーという言葉が出てきたのではないかと思うのですが。

松崎 この次にそれをお話しようと思っていたところです。

伊藤 あれは何回目ですか。

松崎 1,000回でしたね。

伊藤 僕は『昭和史の天皇』について推薦文か何かを書かされたときに、そのコピーをいただいて書いた記憶があります。

松崎 最初の頃は、いわゆる証言をもとにして、その証言を積み重ねて行き、それをひとつのストーリーに作り上げるということがあったわけです。“天心の笑い”等の最初の頃の文章と、2ヵ月から3ヵ月経った頃の文章をご覧になると、炯眼の方は分かると思いますが、最初の頃は殆どいわゆる“地の文”で綴っているわけです。それが3ヵ月くらい経つと、今度はいわゆる証言が非常に多くなってくるわけです。これは何だろうと不審に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、種明かしをいたしますと、辻本芳雄がギブアップしたんですよ。それは、いわゆる文章として書くと、それだけ頭を使い、体力を使い、たいへんな努力が必要になる。逆に、我々が話を聞いてきて、その話を書いて「はい、これよ」と極端に言えば上げるわけでしょう。その証言と証言をつないでいけば、もっと簡単になるわけです。全部を地の文で書いて、そこにパラパ

ラッと証言を挟むよりは、証言をつないだほうが簡単にいけるわけです。それと同時に、その証言を重ねることによって二つの効果がある。ひとつは、いま言ったように、自分が楽になるということ。もうひとつ、証言というのはあくまでもその人の証言であって客観性はないわけですから、主観性の問題です。それに客観性を持たせるためには、複数の証言を合わせたほうが客観性が出てくる。「そうだろう松ちゃん、なっ」「そりゃあ辻さん、あんたね、いいかげんに酒も少し止めたらどう？」と言ったけど、「何を言ってる、このバカッ！」それで毎晩のように銀座ですよ（笑）。あの頃は本当、新聞社というのはおおらかだったな。

いまでもよく覚えているのは、当時、銀座のバーがクラブという名前に変身しだした頃で、そのバーへ連れて行かれると、伊東ゆかりの「♪小指の思い出」が流行した頃で、それをしょっちゅう聞かされてました。それで、いわゆる生演奏的なものが入っていましたよ。僕は本来的に酒はあまり飲みませんから、ああいうところに行ってもあまり僕自身は面白くないんだけど、彼にしてみればやっぱり一人ではね。ところがね、どうも隠密で大分行っていたらしくて、そのダシに使われたのかも分からないけれども、とにかく伊東ゆかりのあの歌は思い出深い曲ですよ。まあ、そういう意味では、我が青春の歌かな。

それで、とにかく証言を取ってきて、その証言をつなげて、その中から事実らしきものを出してくる。しかし、事実であるかどうかは、あくまでも複数の証言の中から読者が選んでくださいよと。つまり、たいへん失礼な言い方になるけれども、こちらからは結論は押しつけません、あなたがたが、結論はあなたがたの立場で考えてくださいよという手法にもつながると思うんです。これは、後でまた例の御厨さんのオーラルヒストリーにも関係してくると思うんですが、オーラルヒストリーという言葉は、我々はこの段階ではまだないですよ。ただ、証言、証言と来ている。だから、あの証言にもうひとつリアリティーを持たせるために、あそこには職業と住所が出てくるんです。これがやっぱりね、客観的な事実関係を明らかにする新聞記者特有な感覚だったと思うんです。

それと、最大公約数的に見ますと、参謀肩章を吊った軍のお偉いさんというのは大体、戦後20年経ってもいいところに行っています。そのいちばんいい例が伊藤忠の彼だし、そういう一流会社のちゃんとしたところにはまりこんでいるわけです。ところが、連隊長クラスになると、田舎の何々市の役場前の代書屋さんをやっていたり、帰農して農家をやっていたりするんですよ。そういう意味では、軍エリートの階層と、エリートではない隊付将校上がりの軍人さん、これのはっきり分かれていたのも面白いなと思いましたし、日本社会の構造にもつながると思っていました。いまでも高級官僚なんていうのは、大学同期生はみんな電話一本でつながっちゃうようなもんですよ。そうやって職業をずっと見ていくと、こんな読み方もあるのかという面白い見方が出てきたわけですね。

また、『昭和史の天皇』はもうひとつ特徴がありまして、それは、いわゆる学者先生や研究者とは全く接触しないで行った仕事なんです。殆ど接触していません。したがって、伊藤先生に取材についてご指導を受けたということはないわけです。それはある意味では、新聞記者が作った現代史というか、よく言えば新聞記者魂であったと思います。

それで、1,000回というと大体、スタートしてから3年くらいでなるわけですが、どこの企業でもそうでしょうけれども、やっぱり新聞社としても、何かそういう折り目のときには、ひとつ花火を打ち上げたいわけですよ。辻本芳雄が、「松ちゃんよ、1,000回だな、何かねえかな」とこう言うわけです。「うーん、そうね、何かやんなきゃなんないけどね……」「とにかく1,000回はるばる来たよな、嘘みたいだよなあ」と。先ほど言いましたように、新聞記事の連載としては、1月から始まって8月まで行っただけで破天荒なことですからね。それにちょっと似ているのは、徳富蘇峰の『近世日本国民史』があるけれども、あれは文献を並べているようなものだから全く違いますから、「やっぱりこれは破天荒なことだよな」「まあ、おめでたい。おめでたいからお前、何かやれよ」と、こう来るわけですよ。

この頃はまだ桑野さんは来てないよね。ちょっと途中でもって紹介をさせていただきますが、ここにいる見目麗しき女性は、後に読売新聞の嘱託として入ってきて、『昭和史の天皇』へ配属された桑野真暉子という女性です。大島大使のヒアリングは、殆ど彼女がやったものです。大島大使にしてみれば、孫娘が来るようなものですし、ことに日独防共協定強化問題というのは、まさに複雑怪奇で面倒くさいものですが、それなんかも噛んで含めるように彼女に喋っているわけですよ。こっちはまたそれを知っているものだから、むくつけき我々が行って話を切口上で伺うよりは、彼女みたいなのが行って、「大使は、大使は」とやると、向こうはいい気持ちになっちゃうわけでしょう、それは僕のストラテジーだったわけですよ。そしたら案の定、大島大使がひっかかったわけです（笑）。

それで、あのとき大島さんが出した条件がひとつあったんです。それは、「俺は国を誤った戦犯である。したがって、君たちが本当のことをきちんと書いてくれるなら俺は何でも話すけれども、いま言ったように俺は国を誤った戦犯なんだから、俺の名前は出してくれるなよ、これは条件だ」ということで、どういう表現を使っていたかな。

桑野 「記録によると」ですね。

松崎 そういう表現で書いてありますが、あれは全部、大島さんです。それで、30巻の目録のいちばん後ろのところに書いていなかったかな。それは大島さんであるということ、大島さんは亡くなっていたから、もういいやと思ってくっつけたわけです。だから、あそこら辺は大島さんの実際の話ですので、そう思って見ていただければと思います。また、後で彼女からも大島さんの印象やその他について話してもらおうことにいたします。

それで、1,000回のときには何か紙面で花火を上げなければならない、それは何だろうなというときに、外交史料館の栗原健先生にお話を伺っていたら、「松崎君、君のところでやっているのは、長いことやって御苦労だけれども、あれはいいね、あのオーラルヒストリーはいいよ」と、「オーラルヒストリー」という言葉がパッと出たんですよ。僕は栗原先生にはたいへん可愛がられていて、まだ部外秘のような資料でも僕には見せてくれましたが、そのときの栗原先生の言葉に僕はビビビビッと来たんです。「(オーラルヒストリー、それいけるぜ!)先生、オーラルヒストリーって何?」「君のところでやっている、ああいうふうに証言を集めた、あれをオーラルヒストリーと言うんだよ」「先生、そのオーラルヒストリーなるものは、僕は初めて伺ったわけ

ですが、それについてどなたか権威の方はいらっしゃるんですか」「この間、角田君がアメリカで開かれた学会から帰ってきたばかりだから、角田君が知ってるよ」と。

それで、僕は角田さんからいわゆる太平洋戦争開戦論みたいな話なんかは伺っていましたが、角田さんという方もなかなか気難しい方ですね、そうでしょう。ただ、どういうわけか話してくれるんですよ。ですから、角田さんとは国会図書館へ行ってお話は何回か伺って面識は得ているので、角田さんに早速電話をして、「オーラルヒストリーというのはどんなものですか」と聞いたら、こうこうこういうものだよと説明をしてくださるので、「じゃあ、先生、そのオーラルヒストリーについて書いてください。それを1,000回記念に出したいから」と。「それじゃあ、書いてあげるよ」と、それで書いたのがこれなんです。日本のジャーナリズムの上でオーラルヒストリーという言葉が出たのは、これが初めてですよ。そういう意味では、これは歴史的な紙面だと思います。

茶園 その紙面の日付はいつですか。

松崎 これは昭和44年10月30日です。

茶園 その新聞は朝日ですか。

松崎 いやいや、読売ですよ。

茶園 読売と言うつもりで、ごめんなさい。いやあ、どうも恐れ入りました。

松崎 ギョッとになりましたよ（笑）。

茶園 いや、私はね、よその新聞が褒めてくれたのだと思ったことと、ちょっと思い違いして言っただけです、ごめんなさい。

松崎 いえいえ。

角田順先生というのは、現代日英関係について、チェンバレンの研究ではひととき優れた業績をあげていらっしゃるし、それにもまして、例の『太平洋戦争への道』を監修なさったのも角田先生ですからね。また国会図書館の専門委員でした。

伊藤 それが朝日ですね（笑）。

松崎 それで、初めてオーラルヒストリーなるものがコロンビア大学で始まって、その学会が立ち上がって、コロンビア大学主催で国際シンポジウムをやるということで、それにどういう経緯でもって角田先生が日本で選ばれたのか、そこを僕は聞き忘れて、いまたいへん残念だと思っておりますが、とにかく角田先生がその学会に行かれたわけです。

そして、この頃はオーラルヒストリーの早く言えばまだ黎明期ですが、その黎明期のお話を「現代史に新しい道標『昭和史の天皇』一千回に」「最も人間的な歴史 オーラルヒストリー」というのをここで打ったわけです。そしたらまず社内から、「いいね、あの名前いいね」と、100人いたら100人がみんなオーラルヒストリーというネーミングを褒めてくれました。それでこっちも「俺たちがいままでやってきたのはオーラルヒストリーだよ！」と、こうやった（胸を張った）わけですよ。そしたら木戸さんなんかも、「あのオーラルヒストリーというのは面白いね」なんて話してくださいましたし、おそらく大島さんなんかも、このオーラルヒストリーというのを、頭のどこかに置いて話して下さったと思うんです。

それから取材には必ずテープレコーダーを持って行くわけですが、初期のソニーのリール式のやつは重いんですよ。あれを担いでやっているうちに、もうちょっとコンパクトなカセット型が登場したわけです。これは最終の頃だったかな。

伊藤 あれはいまだって使っているわけですからね。

松崎 まあ、そういう意味では、日本のオーラルヒストリーというのは、ソニーのテープレコーダーと無縁ではないと思うんです。もしあれが出ていなかったら、きっと現在のようなオーラルヒストリーはできなかったと思います。オーラルヒストリーというのはそういうふうに、ある日、ある人のヒョッと口をついて出た言葉で、それが角田先生の書かれたものによって世の中に登場して、それを読売新聞であたかも自分で作ったような顔をして、先ほど申しました社史には『昭和史の天皇』の特徴は、日本におけるオーラルヒストリーの決定版。特色は、いわゆるオーラルヒストリーに徹したことである」と。“徹したこと”と言っても、それは結果論として徹しちゃったわけです。現在、オーラルヒストリーというのは、ある意味では、固有名詞というか普通名詞になったわけですが、このときのこの新聞が、オーラルヒストリーの日本における曙だと僕は思っております。

伊藤 もうひとつお聞きしたいのですが、読売新聞社史が特筆大書ということではないでしょうけれども、一応高く評価しているということと、テープが放置されて危うく紛失するというような状況との関連は、どういうことでしょうか。

松崎 これは、読売新聞の偉大なるパラドックスであります（笑）。それは僕の口からはちょっと言えません。

伊藤 読売新聞を代表しているわけではないから、いいんじゃないですか（笑）。

松崎 どうもそこまで言うとな、**「あいつ、まだあんなこと言っていやがんのか」**なんて、やっぱりいろいろありましてね。

まあ、桑野君もある意味ではその被害者で、『昭和史の天皇』が**2,975**回で終わった後、僕は文化部へ移されたわけですが、桑野君はそのときに、早く言えば首を切られてしまったわけです。その後、この人が偉かったのは、独力でディズニーランドの試験を受けて入っちゃったんですよ！ あれはたいへんだと思いますよ。この人の並み優れた才能とバイタリティーと、これは特筆大書と言っていいと思います。それで、春と秋の二度、僕のところにお食事券付のパスポートを贈ってくれるんです。うちの孫なんかは小さいときからそれをいただいて、「あつ、来た！ また早くこないかな」と喜んでましたよ。その孫もいまは大学に行っておりますが、そこまで行っていたんですからね。それほど桑野君に僕はお世話になってますよ。まあ、やはり世の中いろいろあるけれども（笑）。

伊藤 まあ、終わり良ければということですからね。

松崎 しかし、少なくともオーラルヒストリーという名前と、それから事実関係を社史というオフィシャルなところで記録しているということは、腹の中でどう思っているのかは分かりませんが、しょうがないなと最低限度はそう思っていると思いますよ。しかし、そのオーラルヒストリーなるものの延長線がはたしてどうなのか。

伊藤 その辺についてはまた後でお話いただくとして、実は、いまお話がありました木戸さんと大島さんのものを中心に書き起こしをやっているんですよ。それで、それをやってくださっている方がここにいらっしゃるんですよ。

松崎 それはご苦労さまです。本当にご苦労さまです。

伊藤 それで、たいへん面白いので、それをやった人のお話をぜひ伺ってみたいということで、本日はここにいられています (笑)。

松崎 これはテープに残っていると思うんですが、「木戸さんの好物は何ですか」と聞きましたら、「僕はワインとブルーチーズとクルミだよ」と言うわけです。「へー、あのブルーチーズですか」「あれは美味しいじゃないか」と。あの方は、アルコールは飲まない方なんです。それはどうしてかという、ひとつには体質的なものがお有りだろうと思うんですが、もうひとつはやっぱり内大臣になってから常侍輔弼でしょう。いついかなるときでも陛下の前に行かなければならないという心構えから、アルコールというものは自制されていたのだろうと僕は推測しているんです。ただ、たまの休みのときには「そういうときのワイン一杯は美味しいよ」と。それで、クルミとブルーチーズというのは訳があるんです。それは「僕が子供のときにうちのじっちゃんまが造った屋敷がいまの駒込にあって、そこで牛を飼ってたんだよ。その牛の乳で作るチーズを僕たちは食べていたから、それでチーズというものは美味しいと思うようになったんだ」と。

それから、六義園が荒れ放題になっていて、石黒忠恵さんが六義園を買おうとしたんです。ところが、そうなれば当然、塀を造らなければならないわけですが、六義園そのものの値段より塀の値段のほうが高いので止めたそうです。そんな話もひょっとすると入っているかも知れません。

伊藤 よく覚えてますね (笑)。

松崎 そういうすつとぼけた話は意外と耳に残っているものなんですよ。そういうかなり中に入ったプライバシーの寸前みたいな話も、あのオーラルヒストリーには入っているんです。これは桑野さんの話に出てくると思いますが、「リップントロップの好物は何だったか」というと、鰻をぶったぎったやつの油揚げだよ」と。油揚げといっても、それはちゃんと胡椒や何かでいろいろあれしてあるんでしょうけど、そんな話もあったような気がします。そんなものもやっぱりひとつのエピソードとして、リップントロップを知る上において面白いと思いますし、そういうことが、このオーラルヒストリーの端っこのほうに少しずつ入れて、それでお客をひくというところもあったわけです。だから、辻本芳雄の文章なんかを見ていると、最後のところに「嗚呼、泣けてくる、泣けてくる」なんていう文章がありますよ。でも、それは新聞記事だから許されるのであって、いわゆる学者、研究者が書いた真面目な論文には、それはちょっと書けないと思うんです。

話は全く飛びますが、僕が國學院で非常勤講師をやっていたときに、梅津・何応欽協定の論文を書いたんです。それを書いた動機というのは、新聞記者としての単純明快なもので、先生方が書いた梅津・何応欽協定についての論文というのは随分あるわけですが、どれを読んでも、時の支那駐屯軍司令官だった梅津さんの姿がないんですよ。それなのにタイトルは“梅津・何応

欽協定”なんですよ。これは一体どういうことなのか。それが、僕のそもそもの出発点なんです。このとき梅津さんは一体どこに行っていたか。記録等を調べてみると、あの時、林銑十郎陸軍大臣が、対満事務局総裁兼陸軍大臣として満州を視察に来ていて、新京（長春）に梅津さんと呼んで支那駐屯軍の軍状報告をさせているんですよ。つまり、梅津さんがその軍状報告に行っている間に、北京で酒井隆などが、梅津・何応欽協定のもとになる要求を何応欽に突きつけたわけなんです。

それで、梅津さんが天津駅から汽車に乗って行ったことは記録に出ているんですが、それが何時の汽車でどういう汽車だったのかというのは、どの記録にも出ていないわけです。それで調べ出したわけですが、試行錯誤してあちこちにぶつかって行ったけれども、最後にパーンと分かったんです。頭のいい優れた学者の方がたくさんいらっしゃるのに、何時何分の汽車でどういう汽車だったのかを書いてくださらなかったのか。分かってみたら、「えっ、そんなこと」と思いますよ。それは、その当時の交通公社の時刻表ですよ。

それを見たら、その前年に満州事変が起こって、それまで北京—天津—山海関を越えて奉天まで行っていた直通列車が、山海関で切られているわけです。これでは具合が悪いということで、外務省が努力をして通車協定を結び、少なくとも北京から奉天まで一日一本の列車を復活させたわけです。それまでは、北京—天津—山海関でストップ。山海関で汽車を乗り換えて、満州国の列車に乗っていかなければならない。そういう不便があったのを、とにかく一日一本の特急列車を作った。これが昭和7年か8年にあって、その列車を利用していることが分かったんです。では、着いたのはどこか。それこそ当時の朝日新聞はやっぱりビッグワンですから、朝日新聞を調べてみたら、梅津軍司令官が新京に着いたという小さな記事を発見したわけです。それを逆算してみると、梅津軍司令官がどの列車に乗って、どうやって行って、「ははあー、この間の隙を狙ってやったな」というのが分かったわけです。それで、僕はそれを芯にして『再考・梅津・何応欽協定』というのを國學院の雑誌に書かせていただいたんですが、新聞記者の目のつけどころというのは、そんなすつとぼけたところにあるわけなんです。

だから、オーラルヒストリーという言葉聞いたときに、ビビビビビッと来てやったということであって、決して事前に考えてこういうものがあるぞということをやったわけではないし、この原稿を角田先生にお願いしたのは、確かに1週間くらい前だったと思うんです。

伊藤 それでは、ここら辺で一旦、休憩しましょう。

——休憩——

（休憩中）

松崎 『前略、昨年まで毎日、新聞の切り抜きをいたし、毎日楽しみに拝見しておりました。よくもあれだけ詳しくお調べになったものと、ほとほと感心して拝読いたしました。ノモンハン事件後、三十数年経ちまして初めて知る当時の出来事の数々。小松原は戦争のことは家族にはあまり話しませんでしたし、また、私も聞かぬようにいたしました。「ただ、自分は命に従い、神仏

に恥ずるような行為だけは決してしてはおらんから安心せよ。ただし、多くの部下を失ったことを、陛下に対し奉り何とお詫びを申し上げてよいやら言葉がない」と声をのみました。これを聞くのは辛く、私もなるべく戦争の話 avoid するようになったわけです。『昭和史の天皇』を読みまして、小松原もさぞ辛かったことだろうと、思わず涙を流す場面が度々ございました。主人が亡くなって三十数年、初めて当時の故人の苦勞を身にしみじみと感じました。死ぬる間際まで自分の日記帳を大切にしており、「いまこれは発表できぬが、十年も過ぎれば真意を発表できよう。それまで大切にしなければ」と、傍らを放さず大事にしておりましたが間もなく死去。自分の思いを果たせなかったことが、三十数年後の今日、皆さまのお力により、よりもっと詳しく世の中にお知らせいただき、故人もさぞかし地下で満足して喜んでおりますことと存じます。』これをいただいたときは、さっきの獻敵ですよ。小松原師団長夫人がわざわざ書いてくださったんです。こういうふうにいると読者の反響というか、当事者の肉親の方が知らない話というのは、随分と発掘できたと私は自負しております。

伊藤 それと関連して、新聞に連載が載ると、関係者から「それは違うんじゃないの」というようなことを言うてくるということは、たくさんあったわけですか。

松崎 それはありました。それはできるだけ次の段階で別の証言が出てきたときに直すというか、ここが違ってたんじゃないかというのを、「あの人はこうっております」とか、あるいは文章の中で直すとか、そういうことはやったつもりです。

伊藤 あるいはそれが次の展開に役立つとか、そういうこともあったわけですか。

松崎 それもあります。ただ、そういう質問はあったけれども、それが山のようにあったということは決してありません。僕の知っている限りでは、全部合わせても数十通じゃないかな。意外と少なかったですよ。そんな手紙も僕はどこかに置いてあると思います。そんなものも欲しいですか？

伊藤 もちろん欲しいですよ（笑）。

松崎 それから、八原博通から来ている手紙などを見ると、八原さんが何を考えて、どういうふうに本にしてもらったことが嬉しかったのかというようなことも分かります。きょう持ってくればよかったのですが、これは「日本の原爆」のときですけれども、広島へ調査団が行ったときに陸軍軍事課兵器担当の新妻清一中佐という方がいて、ちゃんと調査報告書をすぐ上げているんですね。事件の概要があつて、最後に「故にこれはTNT爆弾ではなくて原子爆弾である」と判決を下しているんです。その新妻中佐から来た手紙がこの間、ひょこっと出てきたんですよ。

伊藤 自分の手元から放したくないのかな。

松崎 いやいや、そんなことはないですよ。そういう手紙類みたいな断片的なものは、天下の政策研究大学院大学なんかに寄贈するのは恐れ多いと思って、僕は自制しているわけです。

伊藤 そういう史料も欲しいわけです。

松崎 そうですか。それは一切差し上げます（笑）。

伊藤 分かりました。では、そろそろ再開したいと思いますが、季節に合わせるということで、沖縄玉砕の問題が次に取り上げられたというお話がございましたけれども、第二巻の目次を見ますと、それに続いて突然「幻の近衛特使」という話になります。これはどういう経緯で次から次へと話題が変わっていったのでしょうか。

松崎 それをある学者さんに言わせると、『昭和史の天皇』はブーメランのようだ。ビョーンと一度投げてとんでもない方向に行きながら、またもとへ戻ってくる、こういったブーメラン現象をもっていると。それは、ある意味では煩雑さであり、ある意味では幅の広がりであると言ってくださっているんですね。

それで、近衛特使ということになると、目の前に終戦が控えているわけですが、その終戦の前に何があったのか。その中でいちばん重要な問題はやっぱり近衛特使——つまり、ソ連参戦から前に戻って、近衛特使というものをやっておかなければならない。それは、木戸さんから直接お話が聞ける状況になっていたから、ここらへんで近衛さんをどういう仕掛けで出そうかと。ご存じのように、大本営からこの戦争を徹底的にやるんだというのが出てきて、陛下はそういう大本営の報告文書については内大臣に見せないのに、そのときは異例にも「木戸、こういうものが出たよ」とポンと出した。それを見て木戸さんはびっくり仰天して、これは何とかしなければと考えたわけです。そこで、自分でいまこそ考えていることをやるべきであると。それは何かというとソ連を仲介した和平で、いま米英連合軍との間の和平を直接チャンネルではできないのだから、日ソ中立条約があるソ連を仲介してやるのだと。そこでいわゆる「木戸試案」というのが出てくるわけですが、これも季節に合わせた感じで6月頃から立ち上がってくるわけです。

第2巻をご覧になってお分かりになるように、まず「沖縄」をやりまして、ルーズベルトが亡くなったりということで「名優は次々と舞台を去る」という、これはお喋り加瀬さんが題を付けてくれたんです。加瀬俊一さんらしいでしょう。そして、ここでもってソ連へバツとのめり出して、そこで「木戸試案」がまず出てくる。5月には「皇居炎上」と転がして行き、「沖縄玉砕」「幻の近衛特使」「ダレスの手紙」これはスイスを舞台にしたものですね。それから「北欧での工作」がある。

また、当時の松代大本営とはどういうものだったのかという問題になって、これもやっておこうと。また、大本営は本土決戦をあくまでも呼号しているということで、「決号作戦」と。それから、アメリカの前線将兵に対する東京ローズ。この「ゼロ・アワー」については僕が全部やっただんですが、これが最初だったような気がします。それで、上手くいくときはパラパラッと行くんですね。あのときは恒石さんという方と上手くコンタクトが取れたんですよ。反対に、駄目なときはいくらやっても駄目なんです。それで「ゼロ・アワー」をやった後は、「ポツダム前夜」「天皇制とポツダム宣言」が始まって、「黙殺」が始まったと同時に原爆という問題が出てくる。

そして、“日本の原爆”という極めて秘史的なことを、証言をもってきっちり綴ったのは、この「日本の原爆」が最初にして最後だと思うんです。ことに陸軍と海軍の原爆の研究がどうい

ふうに行われていたのか、当事者が口を開いたわけです。その意味でこれは『昭和史の天皇』の中で、木戸さんの口を開かせたことと双璧をなすことだと僕は思っています。その証拠が、きょうお持ちした京都大学でやったウラン分離の設計図なんですよ。

いま思い出すと、幸いなことに読売新聞では以前に辻本芳雄が、あの有名な原四郎という編集局長に言われて、「どうも原子力の時代になるぞ、原子力をやれ」ということで、苦勞惨憺して『ついに太陽をとらえた』という連載記事を1ヵ月書いたわけですが、「日本でも原子爆弾の研究はやったらしい」なんていうことが一行くらい出てくるんですよ。それで、原子力、原子爆弾への道筋は大体分かった。そして、そこから有名なビキニの第五福竜丸の大スクープが出てくるわけです。

そういうことがあって、原爆はやらなきゃならない。「じゃあ、僕がやりましょうか」と言って最初にやったのが有末精三で、その有末精三の口からポロッと新妻清一の名前が出てきたわけです。それで新妻清一に会ったら、この方は防研の主任研究員をやっているんですが、意外と波長が合うんですね。それで、「おう、俺、資料持ってるぞ」と。広島に原爆が落ちた翌日、正確に言えば翌々日ですが、仁科さんを団長として飛行機で行くわけです。それで、原爆のあの跡地を見て、これは原爆であると判決を下す。じゃあ、その原爆は日本でどうだったのかということをお新妻さんに聞いたら、「それはね、鈴木辰三郎という中佐がいま明星大学にいて、仁科研の原爆研究はこの人が全部取り仕切っていたから会ってごらんよ」と言われたんです。

それで、鈴木さんに明星大学の八王子校舎でお目にかかったんです。鈴木さんという方は、これもまた優秀なんですね。士官学校を出てから砲科学学校を出て、東大の委託研究生になってX線の研究をやっていたんです。その関係で当時の航空技術本部長だった安田さんに、太平洋戦争前の昭和15年の段階で「原子爆弾の可能性について、勉強してレポートを書いてくれ」と言われて、昭和15年の段階で彼が原子爆弾に飛びついたわけです。

その頃は、原子核の連鎖反応、つまり、巨大なエネルギーを出すというレポートは、フィジカルレビューその他で全世界にバーストと出ていて、それは秘密でも何でもないんですよ。だから、理屈はみんな知っているし、原子核物理学の最先端を追究していくと、巨大なエネルギーが得られる。その巨大なエネルギーに目を点けたのがナチスドイツですよ。それで、アインシュタインが、これは大変だということで、アメリカで大統領にレターを送って、それからアメリカも本腰を入れるようになる。

では、日本ではどうだったのか。そこで鈴木辰三郎さんにお会いしたわけですが、この方がまた非常に物腰が柔らかい、いい人なんですね。後に、軍人でいながら明星短期大学の学長か何かをやっていたらっしゃいましたね。それで、非常に懇切丁寧に説明して下さるんですよ。こっちは原爆のことについては『ついに太陽をとらえた』で、原子核物理学なるもの、ローマ大学のフェルミが、原子核の連鎖反応に初めて成功したこと……。

まことにたいへん失礼なことを皆さんにお訊ねしますが、イランがやっているとか、韓国がやっているということで問題になっているウランの分離ということがございますね。あの分離とはどういうことだかお分かりになりますか。もうひとつ、原子爆弾がバーンと爆発しますね。それ

は、極端に言うとマッチで火を点けるのか、どうやったらあれはバーンと爆発するのか。どなたでもいいですよ。

大久保 ウラン 238 からウラン 235 を取り出すのが分離で、238 のほうが多くて 235 のほうが少ないから、濃縮するために 235 だけを六フッ化ウランにして分離して抽出する。

松崎 よくご存じですね。じゃあ、逆に伺いますが、238 と 235 はどのくらいの比率だと思います。

大久保 235 が圧倒的に少なかったと思うんですけど。

松崎 ウラン 238 の中に 235 が 0.7%ですよ。質量で名前が付いているけれども、早く言えば目方の違いで同位元素というのがあるわけです。そうすると、ウランそのものは石ですから、その石からどうやってその中に入っている 0.7%のウラン 235 を引っ張り出すのか。そこが鍵なわけです。まずひとつは、ウラン鉱石をうんと粉砕して、いろいろ薬品を加えて六フッ化ウランというのが出てきます。ここではフッ素が決め手になります。フッ素というのは、いちばん反応が激しい例としては、昔の体温計はガラスでできていますね。あれに目盛りが付いているでしょう。あれはフッ素ですよ。つまり、ガラスを溶かすくらいの反応を持っているのがフッ素ですよ。そうすると、これは極端な話ですが、石ころを粉砕に粉砕をしてフッ素を反応させてやると、いま言った六フッ化ウランというのが出るんです。では、この分離ですが、分離にはどのような方法があると思いますか。

大久保 遠心分離機にかけて、中心部に質量が軽い 235 が集まる。もうひとつ、レーザー法というのがあります。

松崎 それは、韓国がやっているという最近出ている方法ですね。

大久保 あともうひとつが何だったか……。

松崎 彼は非常によくご存じです。ただ、レーザー法というのは、最近できたものなんですよ。では、どういうふうにするのかというと、まさに彼が言った遠心分離なんです。遠心分離というのはどういう仕掛けかということ、洗濯機ですよ。ビューンと回す。だから、きょうお見せしたものは遠心分離器の設計図になるわけですが、もうひとつは電磁分離というもので、巨大なマグネットで電気をかけてやって、質量の差で分ける方法。それから、熱拡散法と言って、長大な二重の筒を作って、その中に気体になった六フッ化ウランガスを入れて温度を高めてやると、自然対流を起こして軽いやつと重いやつが分かれていく。ただ、これはものすごく時間がかかります。それから、サイクロトロンでやる方法がある。また、現在もアメリカでやっている方法は、六フッ化ウランにしたガスの分子が通るような穴をもった特殊なフィルターを作るんです。この開発がものすごい時間がかかる。そのフィルターを何万個とくっつけて、こちらから六フッ化ウランガスを入れてやって、そこに電気で圧力をかけて向こうへ押し出すわけです。そうすると、その中を通りながら 235 と 238 に分かれる。広島にアメリカが落とした原爆は、その方法でできたウラニウム型爆弾というものです。それから、長崎に落とした爆弾はプルトニウム爆弾で、種類が違ふんですよ。プルトニウム爆弾というのは、235 をもう一度サイクロトロンに入れて仕掛けをすると、プルトニウムになるわけです。

聞いたようなことを言って申し訳ないけれども、そういうことが世界ではすでに分かっていたわけです。それを日本ではどういうふうにやっていたのかということになって、それはいままで厳秘だったわけです。学者さんは、あれだけむごい広島原爆、長崎原爆を目の当たりにして、日本で原爆の研究をしていたことをタブー視していたわけです。それを、まあ、いま考えると、いけずうずうしいもいところですが、横浜国立大学に竹内証さんという、実際に熱拡散の分離塔でやった方がいるというのが何かで分かって、それで行ったところが、最初はけんもほろろですよ。「お前みたいな社会部の記者にこんなこと話したって分かるか！」というような調子で、ものの30分くらいで追い返されました。それが、二回、三回とアタックをしているうちに、「こいつは何か分かってきているらしいな」と。こっちは『ついに太陽をとらえた』が虎の巻ですが、そうやっているうちに、彼が本当のことを喋り出したわけです。

それから、理研が上富士前にあるんですが、あそこにアイソトープ研究所というのがあって、そこに仁科研究所の事務をやっていた横山さんという女性がいて、その方に聞いたら全部話してくれたんです。誰と誰がいて、ノーベル賞の湯川さんと朝永さんか、みんなからまっているんですよ。それが全員口をぬぐって知らん顔をしている。

それで、終戦前の8月9日かな、琵琶湖のそばにそういう方が集まって、ウランの分離についての会議をやっているんですよ。そのときのレポートは、学術的なことですし数式ばかりで読んでも分かりませんが、ざら紙に書いたものが家のどこかにありますよ。それをどこにしまったのか、大切なものだからと思っていながら、どこかにやってしまったんですね（笑）。

まあ、そういうことで名前がずらっと分かって、陸軍は仁科研でやっていたことが分かった。じゃあ、海軍はどこなのか。これが分からんわけです。皆目検討がつかなくて困っていましたが、京都大学に荒勝文策さんという実験物理学の泰斗がいて、その荒勝さんのところでやっていたということが、仁科研のほうで分かるわけです。それじゃあ、とにかく京都大学の物理だということで、僕は京都に行ったわけです。

ところが、行ったって訳が分からないんですよ。教授室かどこかに行けばよかったのに、訳が分からないから教室を一つずつ回って、「あっ、誰もいない」というのを繰り返しまして、これが確か寒い頃で、氷雨がしょぼしょぼ降って、大学の生協でラーメンを食ったら胃が焼けちゃって、「もう止めようかな……」と思って歩いていたら、その先生の名前は忘れてしまいましたが、教室に一人の先生がいたんです。それで「先生、京都大学で昔、原爆の研究をやっていたことがあるそうですが、ご存じありませんか。どなたか関係の先生をお聞きになったことはありませんか」と聞いたら、その先生は非常にいい方で、「それは化学研究所の清水君がやっていたという話を聞いたことがあるよ、清水君に会ってごらん」と教えてくれたんです。それで、京都大学付属施設の化学研究所に行ったら清水さんがいたんです。またこの人がね、滔々と喋ってくれるんだけど、肝心なことは喋らないんです。あのときは3時間くらい粘ったかな、それはよく粘ったと思いますよ。とどのつまり、「あの分離機的设计は俺が書いたんだよ、その原図があるんだ」と踏み台を持ってきて上の戸棚を開けて、その中から出してくれたのが、ネズミのおしっこがかかっているような、それがきょう持ってきたものなんですよ。「しめた！」と思いましたね。

それで、清水さんからまた話をダーッと聞いておりましたら、京都大学の物理の先生方は悲惨な目に遇っているんですね。というのは、原爆が落ちた後、京都大学医学部の先生方が医療班を作り、物理の先生方も医療班で行っているんです。それが、行った直後に大きな台風が来て、先生方がいたところに山崩れが起こって、それで何人も遭難されているんですよ。そういうことはあまり出ていませんが、僕は本当はそういうところまでもっと書きたかったんです。ただ、時間を合わせろというひとつの命題があってできなかったんですね。

そういうことで日本の原爆について文章を書いていくわけですが、これが非常に話にリアリティーがない、真実性がないわけです。ところが、「仁科研・木越邦彦助手。(現・学習院大学教授)」と入れると本当になる。この木越という名前は非常に珍しくて、この方は東大の物理を出た方ですけれども、陸軍大臣の木越さんの系列ではないかと思っています。面白いのは、この方が戦後になってからやったのは何だと思いますか。考古学で出てくる壺や何かをアイソトープで年代測定をするという、同じ畑の仕事をまだやっているんですよ。

それで、まず京都大学で清水さんから話を聞いたわけですが、話が行き詰まってしまったんです。清水さんの話だけでは限界点がある、そこから先へ進まないで困ったなど思っていましたら、佐々木伸二という教授がいらっしゃったということがあって、あのとき佐々木先生にコンタクトしたのかな。それで、そのときは「何も知らないよ」とかいう話だったんです。そしたら、その後で大阪読売の科学部から僕のところへ電話がありまして、何だと思ったら、佐々木先生から大阪読売の科学部へ電話があったと。この前、松崎というのが来たけれども、戦争中のあの頃は、腹が減って腹が減って学問どころではなくて、その後、戦後の食料難のときに全部忘れてしまったと。ところが、小林稔教授などと一緒に哲学を語り合う仲間内の会を作っているそうですが、最近になってその会で「この前、読売の記者が来てこんな話を聞いたんだけど、誰か知っているか？」と。そしたら小林稔教授が、「私やりましたよ」と手を挙げてくれた。だから、小林教授に会えばもっと分かるかもしれないということ、大阪読売経由で知らせてくれたわけです。これはしめたと思いましたね。

それから行ってやったら、バラッとそこから割れて、湯川さんとか、朝永さんとか、プロプロと出てくるんですよ。それは実験ではなくて理論ですよ。実験的にはやったけれども、如何せん日本にはウラン鉱石がないわけです。仁科研でも、飯盛先生といったかな、理化学研究所の鉱物担当の先生がいろいろやっていたんですよ。ものの本によると、福島県の何とか鉱山に出るとか、朝鮮で出るとか書いてありますが、日本にはウラン鉱石がないんだから、それで、あの当時は、焼き物に黄色い色を出すのかな、何かの色を出すのに酸化ウラニルという釉薬を使うそうですが、京都大学ではそんなものまで掻き集めてきたそうです。ただ、そんなものは耳かきで量るようなものですよ。

先ほどちょっとお話しましたが、原爆というのは、マッチでボーンと行くわけではない。ウラン 235 がある一定量になると、自然にボカーンと連鎖反応を起こす。ということは、ここにも中性子はワンワン降っていて、それはただ見えないだけの話で、我々の体を全部突き通っているんです。それで、大体約1キロのウラン 235 の塊にするとボーンと行くわけです。中性子が1

個当たれば2つに割れて、2つが2つで4個になり、4個がバーッと瞬間的になる。ということは、1キロにしておかなければ連鎖反応は起こらない。つまり、爆発しないわけです。そうすると、これを何かの仕掛けでピュッとくっつけてやれば、ボーンと行くわけです。それは、いちばんプリミティブな言い方をすると、昔のカメラのシャッターですよ。歯車でパシャッとなるあの理屈でくっつけた。これが広島原爆なんです。

そういうことを、僕も方々の文化センターや市民大学みたいのところへ行ってお話をさせていただきませんが、女性の方々の中には、「日本の原爆はいかん」と言う人がいるわけです。まあ、それはその通りだと思うんですが、原子核物理学を詰めてずっと考えていくと、原爆に突き当たるわけですよ。まずそれはいいとして、じゃあ、原爆はどういうふうにすると破裂するのか。そうすると大体分からない。やっぱりみんなマッチ式ですよ。マッチで火を点けて火薬みたいにボーンと行く化学的な反応だと思っている。そうではなくて、全く物理的な反応で爆発するわけです。

いまこうやって喋っているからといって、あいつ物知りだなと思わないでくださいよ。そんなことも知らないで、「それどうやるの?」と聞いていくことで徐々に徐々に分かってきて、竹内証さんも「しょうがないな、僕の実験日誌によると、何月何日に六フッ化ウランを何グラム入れたけど分離できなかったよ」と。我々の仕事というのはそんなものですよ。だから、よく言われるのは、どうして『昭和史の天皇』は文化部の記者がやらなかったのかということですが、彼らは一応、ものの本だとかそういうものの上で、まあ、たいへん失礼な言い方かもしれませんが、自分なりの理屈を立ててしまうわけです。そこからスタートするから、我々みたいな失敗だらけの話にはならないわけですが、話としては、そういう失敗を積み重ねて出てきたもののほうが、やっぱり本当だと思うんです。ですから、京都大学の清水先生は去年亡くなれましたが、それまでずっとお付き合いがありましたし、清水先生が外国に行かれるとき、あるいは仲間の人たちには、後に角川版で出した『昭和史の天皇』の「日本の原爆」を渡していたそうです。あの方が買っただけでどれくらいあるかな、それは相当な数にのぼると思いますが、それを持って行ってみんな大学に配ってきたそうです。

それで、初めて日本の原爆研究がどういうものだったのかが分かった。だから、有名な反戦論者だった物理学者の武谷三男さんという方がいらっしゃるでしょう、あの方にも僕はお目にかかってお話を伺っていますが、武谷さんも加わっているんですからね。要するに、熱拡散法でやったけれども、とうとう駄目だった。なぜ駄目なのか。六フッ化ウランガスの量が少ないのと同時に、極端に言うと、三角形をした原子、丸い形をした原子、菱形をした原子があって、それが分離塔の中で対流を起こすときにどういう衝突を起こすのか、それをあの方は計算していたそうです。いやあ、学者というのはすごいなと思いましたが、「僕たちは原子核物理学者として、原子核物理学が行き着くひとつの道程は原子爆弾なんだから、僕はひとつもあの研究をやったことは恥じてはいないよ、あれは学問のひとつの道程なんだよ」と武谷さんがおっしゃったので、そういうものかなとは思ったんですね。

そんなことで原子爆弾をやって、「関東軍の最期」に進み、満州の開拓団の話になります。こ

の開拓団の話については、辻本芳雄にはひとつの思い出がございまして、武蔵小山商店街の人々が、戦争中に物が売れなくなり、商店街が閉鎖になって満州へ集団で移民開拓に行ったんです。これが終戦を迎えて惨憺たる地獄の帰還をしてくるわけですが、集団で満州へ行くときの記事を辻本芳雄が書いているんですよ。だから、武蔵小山商店街の人たちにはとりわけ思い出深いものがあつたんです。それで、これは谷崎にやらせたんですね。「谷崎、お前、小山に行って聞いてこい！」ということで、武蔵小山商店街の満州開拓移民団の人々がどれだけ凄まじい悲劇を味わったのかを書いたわけですよ。これはいまでも満州開拓民の悲劇として取り扱われています。辻本芳雄もこれについてはそういう思い出があつたので、一生懸命になっていましたね。

それから、ソ連との関係で北方領土のことがあります。これはちょっと理に勝ったところがあるんですね。これについては、いまはもう亡くなってしまった河野がやったわけですが、ここでは北方領土の国際法的な解釈が随分出てきます。

では、8月19日までどうなるのか。というところで、目の前に茶園さんがいらっしゃるからあれですが、ここでひとつ問題になってくるのは、終戦の詔書なんです。当然のことながら、8月15日に向かって我々は進んでいる。そうすると、終戦の御前会議のことはいろいろと本が出ているし、下村海南さんの本も出ているので大体見当はつく。あとは、その御前会議に出ていた迫水さんや何かの話をつぶしていけば分かるわけです。

それで、この当時のわれわれ取材記者のローテーションとしては、それは社会部の記者ですけども、一回来たら一年くらいやらせて、それをまた社会部へ帰して、次に新しい社会部員を連れてきてやらせる。だから、動かないのは僕だけなんです。それは辻本芳雄にしてみれば、「しょうがねえ、ここで飼い殺しにしてやるか」くらいな思いでしょう。しかし、とにかく僕以外のものはローテーションで動いて、全員で六人いなかったかな。

伊藤 谷崎さんなんかもそうなんですか。

松崎 そうです。だから、五人くらいしかいないわけですよ。それで回して次から次へと代えていったわけですが、最初の1ヵ月くらいは、大体の取材テーマのところを基礎的な資料を読んで筋道だけ頭に入れるというトレーニングをやって、それから取材にボンボン出していたわけです。それで、8月15日がひとつのターゲットであるから、終戦の詔書というのが当然ある。ところが、僕自身も一応、みんなが聞いてきた話を辻本芳雄のところに集めるわけですが、その下調べもやらなきゃならない、自分で何をやるかということも準備をして、現場の中を अच्छゃこっちゃん駆けずり回ってやっているわけです。だから、頭の中でいくつも仕事はあるわけですが、終戦の詔書はやらなきゃならない。

それで、いまでもこそ終戦の詔書というのは皆さんお分かりのようですが、かなりの学者の方でも、いまでも“終戦の詔勅”と言っている方がいらっしゃるわけです。だけど、あれは完全に誤りなんです。公式令という法律に則って、詔書は国家意思の発動としての文書であり、勅語というのは、天皇のお心の言葉なんです。これははっきり分離しているし、書いてある書式を見ても、詔書には内閣総理大臣以下の副署と花押が入っておりますし、もちろん天皇御璽があるわけです。ところが、勅語の場合には、天皇御璽と、そのときの天皇ですから昭和天皇なら裕仁、後

は総理大臣と宮内大臣の副署があればいいんです。それをごっちゃにして詔勅と称しているんですが、これはあくまでも違うわけです。勅語は国家意思の発動では毛頭ありませんし、国民に知らせる天皇のご意思であるわけです。それに対して詔書はあくまでも国家意思の発動だから、内閣閣僚が全員が副署しなければならない。だから、8月15日のクーデターのときに、阿南大臣を突き上げて副署するなど言ったわけです。それこそ責任内閣制の建前上、副署しなければ内閣は潰れるわけですから。それで阿南大臣が突き上げられて、一頃は阿南さんも気持ちの中で「ちょっと……」という気になったかもしれません。まあ、そういうことで、くどくなりますが、詔書は閣僚全員が副署して花押をするわけです。

それで、これはやっぱり迫水久常ということで、迫水さんに会いに行きました。そしたら、迫水久常は滔々と話すわけです。これまた理路整然としているし、木原さんだとか何とかの昔の友達の話がずっと出てくる。その補充取材をやっているんだけど、早く言えば僕だって暇がないわけですよ。夜は夜で辻本芳雄の「♪小指が痛い」なんかにつき合わなきゃならないわけですから（笑）。いま考えると、よく仕事をやっていたと思いますよ。そこで、このときはこういうのをやるという仕掛けを全部僕が作ったんです。ことに終戦の詔書についてはそれをやりました。それで、新聞記者だからできるんでしょうね、あれを現代語訳してあるわけです。あれは僕が書いて、安岡先生のところへ持って行って、「先生、申し訳ないけどこれを見てください」と言ったら、安岡先生が見て「まあ、いいだろうね」とおっしゃったんです。そのことは安岡先生はおっしゃっていないと思いますが、あの現代語訳は安岡先生に僕はお見せしているんですよ。

茶園 分かりました。

松崎 こういうふうにと話というのはいろいろと違うものですし、まだ分からないことはあるんです。

そうそう、いまでも安岡正篤先生のこと覚えてるのは、写真でご覧になってお分かりになるように、安岡先生という方は割合……まあ、早く言えば殆どハゲですよ。それで、これは小石川のお宅に伺ったときのことで、こっちは緊張してしゃちょこ張っているもんですから、あの当時はまだ珍しかったグレープフルーツのハーフを「どうぞ」と出してくれたのに、スプーンがガチガチガチ言って食べられなかったのを覚えていますよ。つまらないことを覚えていますでしょう。それで、「この人が国家を動かした人か、うーん……」なんて思ったりしました。

それから、終戦の詔書のこと皆さんにひとつお気に留めておいていただきたいのは、終戦の詔書に口を挟んだ人の中の一人に、当時の大東亜次官だった田尻愛義がいるわけです。それは、迫水さんが原案を書いているときに田尻さんが来て、迫水さんと田尻さんは非常に仲がいいので、田尻さんにこれでどうだと書いたものを見せたら、田尻さんが言ったのは、「終戦になってこれから平和になろうとするときにこんな漢文調じゃ駄目だから、もっと分かりやすい口語体にしろよ」と言ったそうです。しかし、それについては、そうはいかないということで止めた。それで、その次に田尻さんが言ったのが、これがいちばんたいへんなことですが、「大東亜戦争と言われるくらいに大東亜で戦争をやって、大東亜の民衆にあれだけ迷惑をかけているのに、それに対するお詫びの文言が何もないじゃないか」と。これについては、田尻さんの外交官としてのキャリ

アと、中国やフィリピンで散々苦勞されている思い出がお有りになって、「これは文言を入れなきゃ駄目だよ、ぜひ入れろよ」と。「それじゃあ入れるか」ということで、東亜の何とかというあの文言が入るわけです。

そこで僕の頭がチャカチャカッと閃いたのは、あのとき東亜から指導者が日本に亡命しているじゃないかということです。バー・モウ、チャンドラ・ボース、陳公博、ラウレル、これやってみたらバーッと話が広がるぜと。それで、天皇部屋の参考資料なんかを置いてあるところへ僕が立って、「辻さん、ものは相談だけど、終戦の詔書で田尻愛義がこう言っているんだけど、俺はその通りだと思う。それで、この四人が亡命してきているから、これをやるといろいろ面白いことが分かると思うんだけど」「おー、やれ、お前それやれ」ということで、僕の言うことは辻さんは大体聞いてくれたわけです。

それで始まったのがバー・モウなんですが、以下、ラウレルから始まり、レイテ作戦なんかをやって、陳公博に行くわけです。陳公博については、こっちもここにお出でになる今井さんのお父さんにさんざん盧溝橋事件や何かを取材して、ことに中国についての思い入れがあるわけです。それで、バー・モウと陳公博については、僕が全部やったんです。バー・モウは面白かったですよ。あのときの村の書記が克明な日記を付けていて、中野学校の連中がそれは違うと怒鳴りこんで来たときに、これがあるのよと日記を見せたら、振り向いて帰って行きました（笑）。中野学校のあの何とかという本を書いている人ですよ。

怒鳴りこんできたということで言えばもう一人、けちょんけちょんに怒鳴りこんできたのは、日米交渉のときの井川さんの甥っこかな。

伊藤 それで僕がやることになったんですよ。

松崎 この場を借りまして、たいへん失礼いたしました（笑）。

伊藤 おかげさまで史料が得られました（笑）。

松崎 まあ、そういうことがあって、陳公博をやり出した頃に桑野君が来たんです。

伊藤 陳公博はどこにあるんですか。

松崎 第14巻です。

伊藤 大分飛んでいるんですね。

松崎 それで、これは僕なりにがっちりやったつもりですし、これで殆ど尽きていると思います。陳公博をお世話していたご婦人がいらっしゃるんですけど、確か安岡さんだったかな。その人の息子さんが終戦で復員をしてきて陳公博に会っているとか、何かそんな話でした。その方が後の検事総長ですよ。確か安岡さんだったと思いますが、意外や意外、現代に話はつながって広がっているんですよ。

桑野 不破さんではなくて。

松崎 不破さんじゃない。不破さんは、あれと仲がいいとか何か疑われたんだ。

これは本当にドラマチックですよ。これなんかにも今井少将は絡んでいるんですがね（笑）。

だから、今井少将に僕はたいへんお世話になりましたね。今井少将のヒアリングについては、もう全部お渡ししましたよ。

武田 その割には数がありませんよね。

松崎 どうだったかな……。とにかく、『昭和史の天皇』はある意味では、今井少将なくしては成り立たなかったかもしれません。それくらい僕は今井少将には……。

武田 松崎さんの家にあるんじゃないですか。

松崎 (笑) 俺、亡命してないよ。

それで、これをやっていたときに問題が起こるわけです。その次の第 15 巻と 16 巻をご覧になっていただくと分かるように、16 巻では盧溝橋をやろうと思って、これも今井少将その他から話があつちり聞いていたわけです。ここに一つあつたかな。「お前まだ隠しているだろう」と言われるかもしれませんが、あるんですよ。

伊藤 ほら、あるじゃないですか (笑)。

松崎 この兎沢というのは、ドンパチをやった支那駐屯軍歩兵第一連隊第三大隊第八中隊の一員です。ただ、ドンパチには遇っていません。というのは、あのドンパチのときの夜間演習というのは、新しい対ソ戦闘法の訓練をやっていたんです。その戦闘法を実技で勉強するために、「お前は東京の歩兵学校へ行ってそれを勉強せえ」と言われて、彼は歩兵学校へ行ってたんです。そのときの話がここに載っていますよ。だから、これは当時の第八中隊の生き残りの……。

桑野 これ私の字だ！

松崎 いやあ、歴史だな、これは (笑)。そうだ、これは君の字だ。「名簿を作れ」と言って作らせたんだ。こういう組織図もあるわけですが、彼女が言うんだから、これは間違いなく本物です。当該事件のときに立ち会ったのは誰か、彼女は女性のきめ細かさでここまでやってくれるわけですよ。

桑野 たいへんだったんですよ。

松崎 僕も割合しつこいし、自分でも嫌だから手抜きはさせないほうなんです。

ここに書いてあるのは、「第一小隊第一分隊長・佐藤一男。軍曹、秋田県、内務第一班長、持っていたのは軽機関銃。斧窪聖行。東京、二等兵、第一分隊内務一班」全部出てくるんですよ。ここまではあの秦さんもおそらくやっていないと思うんです。

桑野 汚い字。

松崎 いやいや、そんなことないよ。

こういうものを目の前に置いて、「じゃあ、きょうは誰に取材に行くか」なんてやっていたわけですよ。第七中隊は青森の第五連隊から行っていた部隊、第八中隊は秋田の十七連隊、第九中隊は山形の三十二連隊ですから、混成ですよ。それから、機関銃が第三連隊三個連隊からの抽出連合ですね。こういうのが出てくるんです。

申し訳ない、こんなことで三回目になってしまいますね。

伊藤 三回目は前からやろうと思っていましたから (笑)。では、きょうは大体その亡命の辺りで終わりにしましょう。

松崎 はい。いま言ったように、亡命について僕に火を点けたのは田尻愛義さんであつたわけですが、これから話がバーッと広がっていくのと同時に、第 15 巻の終わりが盧溝橋前夜で、その

次の16巻は「物動」の序幕」ということで、バーンと画面が転換しております。

伊藤 これはなぜですか。

松崎 これは、中国からクレームが付いたんです。

伊藤 そうすると、それは盧溝橋に行く代わりですか。

松崎 代わりじゃないですよ。中国の国務院新聞処から正式に読売の支局を通じて言ってきたのは、読売新聞の陳公博のくだりはけしからんと。陳公博は中国にとって漢奸である。その漢奸を日本国民がみんなでかばって、しかもこれを情緒的に書いているのは、中国政府としてはまことに不愉快極まりないということを、この「第八中隊（盧溝橋事件の前夜）」をやっているときに言ってきたので、社の幹部がたいへん心配したわけです。というのは、このことがきっかけになって、北京特派員をまた追放されるのではないか。これは社としてはいちばん困るわけです。

桑野 あれは、盧溝橋でどっちが一発を撃ったのか、それを明日の朝刊で書く前日にストップがかかったんです。それについてはもう松崎さんが書いていらして、要するに、その一発は日本ではなくて向こうから来たのだという、その原稿が出来上がっていたんですけれども、その前日にストップがかかって、それで日独防共協定に行っちゃったんです（笑）。

松崎 編集総務の辻本芳雄から電話がかかってきて、「松ちゃん、ちょっと来てくれ」と言うので三階の編集局へ下りて行ったら、「松ちゃん、お前、明日から病気になれ。病気になりゃあ“執筆者病気につき当分連載中止”のお詫びでもって止められる」「それ一体何ですか？」と。そしたら、「実は中国政府から正式にクレームが付いた。こいつは具合が悪いんだ。だから、病気になれ」というわけです。僕はそのときに、「ちょっと待ってくださいよ。それは社の形としてはそうだろうけれども、せっかく16巻まで来ているんですよ。盧溝橋のまさに銃声一発引き金を引くところまで来ているのに、ここで止めたらず必ず週刊新潮か週刊文春が狙って、あることないこと書くに決まっていますよ、それは避けましょうよ。これまで実績を作ったのに、それを無にすることはないでしょう」と食い下がったんです。ここではっきり言うておきますが、盧溝橋の一発は日本が引いたんじゃないですよ。あれは中国側が引いたんです。そしたら辻本芳雄が、「そういえばそうだな、ちょっと待て、編集局長と相談してくるから」と。それで相談してきて、僕はそのときに「とにかく続けましょうよ、僕が責任をもって方向転換しますから。もう陳公博や盧溝橋には触れないで、あたかもそれと関係があるような方向へ持っていくますから」と言ったら、辻本芳雄も長谷川実雄編集局長も、もうあのときは専務になっていたのか、おそらくその話は原四郎まで行っていたと思いますが、「分かった。じゃあ、方向転換をすることを条件にしてやろう」というので、「物動」の序幕」となるわけです。つまり、どういうふうに近衛内閣において総動員体制で物資動員計画が始まったのか。だけど、こっちも最初は訳が分からないんですよ。

伊藤 この間に批判があったわけじゃないんでしょう。

松崎 ないです。だから、最初はこっちも分からないんですけど、でもそういうことがあったということで、最初のところは鈴木浩平にやらせたんです。彼はもう亡くなりましたが、後に労務担当か何か偉くなったんですよ。

伊藤 ある程度、予備知識があったわけですか。

松崎 いやいや、なかったですね。

桑野 私の日独防共協定もそうですが、浩平さんも脇をかためる意味で命題が松崎さんから与えられていて……。

伊藤 その準備をしていたわけですね。

桑野 そうです、少しずつの準備はあったんです。

松崎 俺、頭いいなあ（笑）。

桑野 それで、それが盧溝橋事件の中止で主役になったわけです。

松崎 だからパッと転換できたのか。

伊藤 そうでないと、ちょっと日にちを置かないとできませんよ。

松崎 オーラルヒストリーというのはこういうものですね、一人だけじゃ駄目なんですよ。ということで、まことに申し訳ありませんが、これで終わらせていただきます。

伊藤 それで、これ以降は毎月の予定が全部入っているものですから、今回は来年の4月以降になります。ただ、場合によっては臨時にやってもいいのではないかと思いますので、そこら辺は検討させていただきます。

松崎 今度は彼女が全面的に出てきて、大島さんのお人柄だとか、その他いろいろお話をすると。

伊藤 いやいや、まだ物動の話等もありますからね。

松崎 物動については、陸軍の影山さんだったかな、あの人がたいへん褒めてくれたんですよ。

茶園 すみません。私、先ほどお叱りを受けました、雄松堂から『密室の終戦詔勅』を出しておる茶園義男でございます。それで、安岡先生からお聞きしたりしていろいろやったんですが、私の本にも公式令は参考として載せてありまして、そのときも分かっていたんです。ところが、私が出した昭和56、7年には、「詔書では軽い」と編集者が逆に言うんですね。それで、両方を入れた詔勅を入れろということで、あれは詔勅になっております。ただ、それは確かにそうだと思いますので、今後は訂正させていただいて仕事をしていきたいと思っておりますので、それを一言申し上げておきます。

松崎 分かりました。とにかく、そういうふうにも最初のところから動き出して、頭の中にはいろいろなものが入っているわけですよ。その一方では、八原参謀の『沖縄決戦』なんていう本も出したりし、『昭和史の天皇』がある一定量になると本にする。そうすると、それも責任者として目を通さなければいけない。あれやこれやで結構仕事はあって、それはそれなりに充実した仕事だったと思うんですが、どうでした？

桑野 充実してましたね。面白かったですよ。

茶園 たいへんよかったですね。

桑野 盧溝橋と柳条湖の区別もつかないまま放り込まれましたから（笑）。

茶園 次を期待いたします（笑）。

松崎 いま言いましたように、最初は柳条湖と盧溝橋の区別もつかないようなところから我々はやっているんですよ。それが逆にある事柄にぶつかると、それは何だろうという新聞記者特有の

何だろ癖がありまして、だからこそ新聞記者でなければ書けなかった現代史が出来上がったと思うんです。それで、今井さんのような……今井さんって、この今井さんじゃなくてお父さんのほうですよ。あの今井さんのような非常に温和な方が、バターン作戦であんなご苦勞をされているなんていうのは、確かにあの『支那事變の回想』には出てくるわけですが、あんなひどい作戦をやったとは知らなかった。

伊藤 この間、今井さんはフィリピンの戦跡を見てきたんですよ。

今井 はい。バターン市の128キロくらいを全部……。

松崎 それはすごい。

今井 いや、それは車ですけど（笑）。起点から終点の収容所まで。

松崎 あれをもう一度自分なりにやってみると、やっぱり本間雅晴中将という方は、ああいう方だったんだなと。田村怡与造の娘が永井荷風とくつついちゃう、そういうような関係だったのだなという印象は受けますね。それはあくまでも先入観というか、ひとつの僕なりのエピソードですが、前に本間中将について角田房子さんが書かれた『いっさい夢にござ候——本間中将伝』という本を読むと、こんな綺麗なものじゃないぞと思うんです。本間中将の最初の奥さんについて、その奥さんのお父さんは有名な日露戦争の作戦計画を事前に立てた田村怡与造ですが、その娘と永井荷風が、本間雅春中将が駐英武官補佐官だったときにくつついちゃったんですね。そういうことを考えると、やっぱり本間雅晴中将はかなり屈折した神経のもとに置かれたと思いますが、あの方は軍歌をたくさん作っているんです。

茶園 先生、先ほどの中央公論の別冊『歴史と人物』は、何年の何月号ですか。

桑野 昭和48年の12月号ですね。

茶園 ありがとうございます。

伊藤 それでは終わりにしましょう。どうもありがとうございました。次回をお楽しみに。

松崎 質問を受けなかったこと、申し訳ございません。また、こういう機会を与えてくださった皆さんに感謝申し上げます。

伊藤 また次回もよろしく願いいたします。

(終了)